**北円堂**

この建物は721年に興福寺の建設者である藤原不比等（659〜720年）のための記念堂として建設され、のちに北円堂と呼ばれるようになる。1049年の火災で焼失し、再建された建物も1180年の平家の大将・平重衡（1158〜1185年）の軍勢による南都焼討で破壊された。現在の建物は1210年に完成した。興福寺の伽藍のほぼすべてを焼き尽くした1327年と1717年の大火の被害を免れた北円堂は、興福寺に現存する最古の建物であり、数多くの宝物が収められている。

北円堂の仏像の中心をなすのは、本尊の弥勒如来である。その両脇には法苑林菩薩と大妙相菩薩の像が立ち、また無著と世親の2人の僧の像もある。これらすべては鎌倉時代（1185〜1333年）の作である。近くにはより古い年代の像が4体あるが、これは四天王像である。すなわち増長天、多聞天、持国天、広目天である。これらの像は誇張された顔の表情で有名で、持国天などは、ふくらんだ目が顔から飛び出しそうに見える表現で、ユーモラスとも言えるほどである。791年につくられた木心乾漆造で、国宝に指定されている。